

# 博士論文の要約

氏 名

児島啓祐

論文題目

『愚管抄』の学問史的研究

博士論文『愚管抄』の学問史的研究は、『愚管抄』を中世の注釈書として読みなおし、従来の文学史的位置づけでは捉えられなかった、本書の特異な方法や歴史観の学問史的意義及び背景を新たに見出した論考である。

**第一部 『愚管抄』の方法と台密注釈・口伝——文体史と密教学史の交叉**では、慈円の歴史を創る方法（視点・文体・叙述態度）が、台密学（注釈・口伝）に基づいていたことを解明した。**第二部 『愚管抄』の史観と台密儀礼・講会——歴史叙述と法会の往還**では、『愚管抄』独自の歴史観と、講会における唱導・儀礼の密接な関係について考察した。**第三部 『愚管抄』の災異叙述と陰陽道——中世天文道の学説交流・鬭諍をめぐって**では、密教・陰陽道の担い手を中心とする、災異に関する諸説があふれかえる状況に対処するため、慈円は諸説を取り合わせ、真偽を見定めながら歴史を紡ぐことを実践し、かつその具体的な方法を読者に説いていたことを論じた。**第四部 『愚管抄』本文・伝本考——学問史研究の視座から**では、諸本比較や装訂に関する考察を通じて、中世後期から近世前期を中心に『愚管抄』の本文流動が起きていることを指摘し、その様態が知識人同士の興味深い学問交流を物語っていることを示した。

以下、順を追って本稿の各章の要旨を示しておきたい。

## 第一部 『愚管抄』の方法と台密注釈・口伝——文体史と密教学史の交叉

**第1章 『愚管抄』の勸学——台密注との比較を通じて**では、慈円の勸学的表現（初学者に向けた配慮・工夫）の基盤に、台密学の諸書（注釈・論書・口伝）を据え、『愚管抄』の叙述を概括的・包括的に捉えなおすことを試みた。従前の歴史書・歴史物語には認められなかった、新たに獲得された『愚管抄』独自の勸学的な態度は、慈円の台密実践を通じて育まれた特質であったと指摘した。

**第2章 『愚管抄』の文体とその思想的背景**では、殊に慈円の俗語を積極的に用いる異色の文体に特化した考察を行った。台密関係の注釈書や和歌とその序跋等に見える記述を参照しつつ、慈円の著述のなかでも際だって『愚管抄』の文体は「浅略」（初学を導くための

平易な方法)に徹していることを指摘し、密教の「浅略深秘」説の実践の到達点として、『愚管抄』の特異な文体の獲得を評価した。

**第3章 『愚管抄』「智解」考——慈円の密教学的基盤をめぐって**では、特に慈円の学問態度と台密の口伝の関係について掘り下げる分析を行った。あるがままに移りゆくものを受け取る、台密書に散見される「法爾自然」の思想は、修行者がおのずから悟りへといたる「自然智」「無師智」「自智」「智解」の語に通じるものであると指摘した。修学者の「智解」を重視し、自発的開悟を求める慈円の学問態度は、『愚管抄』や台密注釈に共通して見られることを説いた。「自然智」こそ、形骸化していた師の口伝を乗り越え、「今案」「愚案」を「師説」「本文」と等位として位置づけるための慈円の理論的根拠であったと述べた。本章では、慈円の創造的な活動、すなわち密教修法の変革や『愚管抄』の特異な歴史叙述の創出を、「自智」「智解」の慈円自身の実践の所産として位置づけた。

**第4章 『愚管抄』「法爾自然」考——道理史観と顕密仏教の関係をめぐって**では、『愚管抄』独自の歴史観である道理史観に、密教由来の「法爾自然」思想の影響が看取されることを指摘した。道理史観は、出来事の背景の説明が可能と見る「因果」史観と、不可能と見る「自然」史観の融和したものであることを見出し、「因果」・「自然」はそれぞれ顕教・密教に由来する語であることを述べた。すなわち本章を通じ、慈円の道理史観は、顕密仏教の合一を試みる台密の学問活動が結実したものと捉えられることを示した。

**第5章 慈円の観法と和歌——『拾玉集』「法華要文百首和歌」二四五七歌を中心に**では、天台僧慈円による真言密教の代表的観法、月輪観・阿字観の実践について、『拾玉集』の和歌の分析を通じて検討した。慈円は、観法を重視し多数の注釈を残した真言僧覚鑊の影響を色濃く受けながらも、その思想を天台の学問の側から読み替え、新たな和歌表現を獲得したことを論じた。従来「天台の高僧」ゆえに、真言僧「西行ほど徹底したものではない」と論じられ顧みられることの少なかった慈円の密教理解を、捉えなおす必要性についても提起した。

## 第二部 『愚管抄』の史観と台密儀礼・講会——歴史叙述と法会の往還

**第1章 昌泰の変の歴史叙述と天神講——『愚管抄』巻第三「北野ノ御事」と菅原為長『天神講式』との比較を通じて**では、天神信仰の法会関連文献(縁起及び講式)と『愚管抄』巻第三「北野ノ御事」すなわち昌泰の変の叙述のあいだに密接な関係が認められることを指摘した。菅原為長と慈円が昵懇の間柄であったことを明らかにした上で、『天神講式』、『北野天神縁起』、『愚管抄』が三者三様の歴史叙述を展開しており、共通の成立圏を想定

すると矛盾が生じる部分があることを示し、伝記的研究を前提に本文を読むことの問題点を指摘した。「慈円圖」を考えるよりは、三書が法会を介した口頭伝承（『愚管抄』では「口伝」と記されるもの）を共有していたと捉えることの妥当性を論じた。

**第2章 慈円の台密儀礼と歴史叙述——『慈恵大師講式』と『愚管抄』の関係**では、『愚管抄』巻三には、聖徳太子、鎌足、道真、良源はいずれも観音であり、権者であるという系譜が見出される点に着眼し、殊に鎌足と慈恵大師の表現と、慈円の講式儀礼・台密修法との連繫について考察した。従来、撰関家にゆかりの深い人物を観音の系譜に位置づけ、歴史の事件を肯定的に記述する『愚管抄』のこうした態度は、撰関家偏重の表現と見られてきた。確かに慈円の講式には撰関家への視点が見られるものの、慈恵観音説自体は講式儀礼の学統を引くものであることを指摘した。さらに『愚管抄』における殺生の善悪をめぐる表現と、台密の降伏法との密接なかかわりを明らかにした。『愚管抄』の叙述を読み解く上で、慈円が携わった儀礼にも目を配ることの意義を説いた。

**第3章 『愚管抄』の説経——花山院出家譚をめぐって**では、『愚管抄』巻三、花山院出家事件における叙述の特色とその意義について、従前の研究では撰関家中心の記述と批判的に捉えられてきたものを、文脈に即して捉えなおし、慈円の仏法史叙述として読み替えた。『愚管抄』の花山院出家事件には、類話に見られない慈円独自の説経が挿入されており、その内容自体に花山院の時代を意識した表現が看取されることを指摘した。さらに花山院を誘い出す道兼の「道心」が強く打ち出された描写や、孝行を選ぶか出家を選ぶかの葛藤など、『愚管抄』では兼家・道兼の陰謀ではなく、源信と同時代の、仏法の盛期の不可思議な出来事として花山院出家譚が理解されていることを論じた。

**第4章 『愚管抄』の鎮魂——『懺法院十五尊釈』との比較を通じて**では、『愚管抄』の平家怨霊記事を中心に、『平家物語』成立圏に慈円がいたとする見方を踏まえた『愚管抄』理解に対する再検証を試みた。まずは『愚管抄』における「平家ノ怨霊」の事例であるとこれまでは読まれてきた箇所が、実は保元の乱の怨霊を指していることを指摘した。さらに、保元の乱の怨霊の表現との比較を通じて、平家怨霊への慈円の関心の低さを示した。大懺法院関連の史料をひもとくと、『愚管抄』の場合と同じように、平家ではなく、むしろ撰関家を亡ぼす保元の乱の怨霊の鎮撫に焦点があった。慈円は、台密の修法の担い手として、いかに怨霊を鎮めたか、その供養法については、第一部第1・2章でも論じた「浅略深秘」や、第一部第5章で見た「阿字観」が、ここでも重要な視点として駆使されていることを示した。

### 第三部 『愚管抄』の災異叙述と陰陽道——中世天文道の学説交流・鬭諍をめぐって

第1章 元暦地震と龍の口伝——『愚管抄』を中心にでは、中世注釈論の視座から『愚管抄』の元暦地震記事（巻五 後鳥羽）に見える「龍王動」説を災害史料としてではなく、『愚管抄』特有の歴史の注釈的表現として読み替えた。史書・古記録などとの比較を通じ、『愚管抄』における天文密奏説が怨霊思想と対置される特色を浮かび上がらせ、先例中心に災異説を記述する他の史料とは異なり、『愚管抄』では諸説を独自に取り合わせ、その真偽を吟味する方法論が採られていたのである。それは『夢想記』にも共通する手法であることも指摘した。

第2章 『愚管抄』の災異叙述と中世天文道では、これまでの『愚管抄』の学問的基盤やその担い手の交流を明らかにする研究が中世日本紀論を中心に展開してきたことを指摘し、日本紀以外の学にも注意を向ける必要性を説いた上で、院政期の天文道の史的背景と『愚管抄』の叙述の特性との連関を見出した。『愚管抄』における天変地異の歴史叙述は、陰陽師をめぐる中世天文道の活動によってもたらされ、それらを慎重に取捨選択したものであり、また同時に真偽の見極め方をも示すものであった。『愚管抄』の「慈円」自身が活写される描写にも注目し、その記述を災異に対する理想的な対処の仕方を説くものとして位置づけた。

第3章 『平家物語』の陰陽師像とその史的背景——安倍泰親と時晴の対比表現をめぐってでは、第三部第2章の考察との関係から、中世天文道における陰陽師の活動により、『平家物語』にはいかなる影響が見られるかについて考察を試みた。『愚管抄』では晴道党の安倍晴光が重視されていたが、『平家物語』、殊に延慶本・長門本の陰陽師像に、泰親を起点とする流派の陰陽師による言談活動の影響が認められることを明らかにした。従前の論のように、「安倍系陰陽師」と概括的に捉えるのみでは、泰親と時晴の両者に対比的な人物像が見られる理由を説明できないという問題点を指摘し、新たに一二世紀後半以降に見られる安倍氏内での正統をめぐる流派闘争の影響を踏まえて読みなおすことの有効性を提示した。

第4章 『平家物語』の災異説と中世天文道——治承年間の彗星出現記事をめぐってでは、人物像を掘り下げた前章とは異なる観点、すなわち災異説の内容自体を検討する視点から、『平家物語』における泰親流の影響を考察した。具体的には、治承年間の二つの彗星出現記事をめぐって、泰親の登場場面を中心に『平家物語』の災異説が元来陰陽師たちにとっていかなる意義を有して継承される学説であったかを明らかにした。そもそも治承年間の天変を「彗星」と捉えていたのは泰親とその子息の独自説であったことを指摘し、『愚

管抄』には当該記事が見られないことにも注意を向けつつ、従来の研究で中世の災害観のように一史料を通じて時代を普遍的に論じる方法に疑問が認められることも述べた。

#### 第四部 『愚管抄』本文・伝本考——学問史研究の視座から

第1章 『愚管抄』本文再考——島原本の性格と意義では、従来の伝本研究の問題点と向き合い、島原本の位置づけの再検討を試みた。底本の考証を通じて、島原本が二種の形態と三種の本文からなる取り合わせ本であることが判明した。島原本の伝来史的意義は、貸し借りによって揃えなくてはならなかった、希世の書『愚管抄』の江戸前期の書写事情がうかがえる点や、林鷺峰と松平忠房との交流が浮かび上がる点に見出されることを指摘した。

第2章 『愚管抄』の本文表記と装訂——古筆切の検討を通じた中世の享受に関する一考察では、享受史・本文史の観点から『愚管抄』の古筆資料に注目した。古筆切の検討を通じて、『愚管抄』がいかなる本文表記や装訂で中世の読者達に伝えられ、どのような書物として認識され読まれてきたのかについての考察を試みた。その結果、古筆切の本文系統が文明本系に近いことが判明し、これにより文明本系の本文史を辿ると、漢字・平仮名交じり表記から漢字・片仮名交じり表記への変遷過程がうかがえることを指摘した。さらに古筆切のなかに卷子装や押罫があることに注意して、中世の『愚管抄』が格式の高い装訂で伝えられていたことを論じ、『愚管抄』が『本朝書籍目録』の「雑抄」（真名や片仮名宣命体の抜書・注釈・辞典類が多く含まれる範疇）に含まれ真名の学問世界に近似する書物という認識があったことについても言及した。

第3章 『愚管抄』新出写本の紹介と考察——成簀堂文庫本・天理本との関係をめぐってでは、新出写本（和田琢磨氏蔵の巻五・六の零本）の紹介と諸本における位置づけ及びその伝来史的意義について論じた。諸本比較を通じて個人蔵本が天理本と近似する本文を有していることを指摘した上で、ほぼ一致する外形（表紙や寸法等）や、親本の所蔵者の印を共に有することから、両本が同一の親本を持つ兄弟関係にあることを明らかにした。両本が近似するために、巻が一部混ざって伝来したことについては、原本注記（傍記・貼紙）や行取り等にうかがえる書写態度の明確な違いから見出した。表記や行取りは親本に忠実ながら本文の積極的な校訂を行った光榮本（天理本巻一～巻五、七・和田本巻六）と、仮名表記を漢字表記に多数改め行取りは意識していないものの親本の本文は極力尊重して写した重本（和田本巻五・天理本巻六）である。両書共通の底本は、元禄期に青蓮院尊証親王に寄進された光圀本（成簀堂文庫蔵）であることを指摘した。以上三本の意義は、尊証や光圀をめぐ

青蓮院及び多武峰の近世中期の『愚管抄』享受がうかがわれる点に認められることを論じた。

以上のように、総じて本稿は、中世注釈としての『愚管抄』の形成から、その享受・伝来へと至る学問史を描き出した論考である。研究史の蓄積が多いゆえに生じることになった、問題ある『愚管抄』論の通説を一つ一つ疑い、注釈・文脈把握・本文研究・伝本整理という基礎的な考察を通じて、『愚管抄』をめぐる学問史の素描を試みた。その結果、浮上してきた、今後取り組むべき重要課題を三点提示し（①顕密仏教史における慈円の教学上の位置づけ、②文学史における従来の慈円像の再考、③『愚管抄』の諸本整理・善本選定・本文史及び伝来史研究の重要性）、本稿を結んだ。